

---

# 発達理論の学び舎

Back Number: Vol 292

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」

---



No.371 慈悲創造

---

## 目次

- 5821. 仮眠中のビジョン:フランソワ・クーブランの楽譜の到着
- 5822. 今朝方の夢
- 5823. 習字と絵画の組み合わせ
- 5824. 今朝方の夢
- 5825. コロナの落ち着き
- 5826. 今朝方の夢
- 5827. 書籍の注文:マッシュルームの美味
- 5828. 書斎の眺めと光の共有
- 5829. 死後の世界に思いを馳せる体験:今よりもずっと遠い場所へ
- 5830. 今朝方の夢
- 5831. 皮膚感覚の鋭敏化
- 5832. 移ろいとしての自己と移ろい性の背後にあるもの:英語学習について
- 5833. 物を無駄にしない心
- 5834. 今朝方の夢
- 5835. 「損害賠償」という言葉と国道のサバに関する記憶
- 5836. 受験の失敗に関する記憶・算数/数学に関する記憶と思い出
- 5837. 幼少時代の思い出の続き
- 5838. 今朝方の夢と幼少期のエピソードの続き
- 5839. 守り続けてきた自己の創造性
- 5840. アテネ旅行の延期とここ数日間の睡眠の質について

夕方の空に雲が覆っており、今日は夕日を拝むことができなさそうだ。1日を振り返ってみると、今日は雲が空を覆っていることがほとんどであり、ほんの少しの時間だけ太陽を拝める時間が午後にあった程度であった。明日もまた今日と同じような天気のようなようだ。

時の静かなる進行。それに自己の存在を委ね、時の進行過程と一致させる形で創作活動を続けていく自分がある。そうした形でゆっくりと前に進んでいくこと。兎にも角にも緩やかな歩みを継続させていくこと。それが肝要だ。

今日は午後の仮眠中にビジョンを見ていた。2つほど印象に残るビジョンを見ていて、片方を覚えている。私はサッカースタジアムにいて、ゴール裏のカメラマンたちが集まる場所に座っていた。コートの上では試合が行われていて、元日本代表のストライカーの選手がライナー性の強烈なシュートを放ち、それがゴールポストを外れて私の方に向かって来た。そこでびっくりしたところで目が覚めた。目覚める一瞬前に、ベッドの上の自分の身体がビクンと反応していたことを覚えている。夢と同様に、仮眠中のビジョンの中の身体と物理的現実世界の身体が密接につながっていることを示唆する現象だった。そういえば数日前にも同様な身体反応を示すビジョンを見ていたことを思い出した。

夕方に郵便受けを確認したら、フランソワ・クープランの楽譜が届いていた。クープランはバッハと同時代に活躍していたフランスの作曲家であり、少し前に作曲理論書に掲載されているクープランの曲の抜粋に感銘を受けて、彼のピアノ曲の楽譜を2冊購入した。2冊合わせて450ページを越すほどであるから、ほぼ全てのピアノ曲が収められているのではないかと思う。今夜から早速クープランの曲を研究していこうと思う。クープランの曲以外にもその他の作曲家の曲を参考にして、いくつか曲の原型モデルを作り終えたら、いつものように絵を少々描いて就寝に向けた準備をしたい。

明日からの作曲実践では、絵筆を思うがままに任せて気ままに描くかのように、メロディーラインを感覚的に走らせることもあれば、絵筆を意図的に緻密に動かしていくかのように、構築的にハーモニーを作っていこうとする2つのアプローチの双方をより意識していく。朝にコーラルを作曲する際には、その日の朝の感覚を確かめたいため、どちらかというと前者のようなアプローチを採用する割

---

合が高いように思える。そこを無理に後者に帰る必要はない。早朝の最初の作曲実践では、その日の感覚の確認及び観察をして、そこから2つのアプローチの比重を様々に変える形で曲を作っていく。日々実験と観察を繰り返し、そこから省察してまた新たな気づきと実験アイデアを得ていく。

フローニンゲン:2020/5/12(火) 19:33

## 5822. 今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。今日もまた空には雲が覆っていて、気温も低い。天気予報を確認すると、明日からは再び晴れの日が続くようだが、肌寒い日はしばらく続く。

小鳥たちの鳴き声に耳を傾けながら、早速今日の夢に振り返り、その後、本日の創作活動に入っていきたい。夢の中で私は、一台の車の中にいた。その車はワゴン車のようにあり、中は広々としていた。運転席を見ると、予備校時代にお世話になっていた英語の先生が運転をしていて、助手席には友人の女性が座っていた。そして奇妙なことに、右ハンドルの運転席の右横にさらに小さなシートがあり、そこに親友(HS)が座っていた。

私たちは小旅行に出かけているようであり、車内の雰囲気は楽しげであった。懐かしの名曲が収められたCDを先生が持参しており、それを車内で聴いていた。運転時間が長くなっていくにつれて、CDの数も増えてきた。私は後ろの席に座っており、CDを取り換えるたびにケースに入れていくことをしていた。しかしながら、あるとき、私の手違いか何かでケースを入れ間違えてしまうことがあった。ひとたびケースを入れ間違えると、ケースの個数は一定であるから、残りの分のケースもほぼ全て入れ間違えてしまう結果となった。先生はそのことに気づき、運転をそっちのけで、ケースとCDが対応しているのかを確認し始めた。

車はまだ走っている最中だったので、それは危なく、運転席の右横に座っていた親友がハンドルを取って、先生の代わりに運転をし始めた。しかし、親友も携帯か何かで調べ物をしながら運転していたので、途中で道を外れてしまい、ガードレールのようなものに車をぶつけてしまい、車に傷が入ってしまった。そこで夢の場面が変わった。

---

次の夢の場面では、私は海や街の上空を飛んでどこかに向かっていた。どこかとは、大学時代に過ごした東京の街のようだった。最初私は、海の上を飛んでいた。その日は少しばかり雨雲が空を覆っていて、雨が降らないうちに早く目的地に辿り着きたいと思っていた。

しばらく空を飛んでいると、島と島をつなぐ大きな橋が見えた。片方の島は外国の領土のようであり、もう1つの島は日本の領土のようだった。私は一旦高度を下げたて飛び、外国の領土の島に降りようとした。だがそこで休憩をしてしまうと、再度空を飛んでいくのが億劫になってしまうように思えたので、地面に足をつけることなく、その島の雰囲気だけを確認して再び高度を上げて目的地に向かった。

すると自分の脳内に、誰かの声が聞こえて来た。その声曰く、空を飛んで橋を通過していくよりも、陸から歩いて橋を渡って行ったほうが早いとのことだった。最初私はその声が述べていることを疑ったが、確かに橋には歩道がついており、またどういいうけか橋の上空は気流が激しく、下手をすると海に落ちてしまうように思えたため、歩いて橋を渡ることにした。すると、次の瞬間には、私はもう橋を渡り切っていた。

そこは日本の領土であり、そこからまた空を飛び始めた。もう目的地の街のすぐ近くだと思っていたが、どうやらそこはまだ大阪のようだった。しかし、大阪と東京は目と鼻の先でもあったので、あと数分ほどで目的地に到着できるかと思った。眼下には国会議事堂のようなものが見え、その周りは緑豊かな公園になっていた。

ちょうど目的地の街に近づいて来たときに、眼下に人の姿を見た。私は高度を下げたてその男性に近寄ってみると、その男性は包丁を持っていて、危険な目をしてた。そこで私は恐怖を感じ、その男性から逃げるようにしてもう一度高度を上げた。街で見かけた最初の男性がまさか不審者だと思わず、正直かなり驚いてしまった。そこからまた空を飛んで行こうとしたところ、不審者の近くに別の男性がいた。私は上空からその人に声をかけ、不審者の存在について教えた。

すると、その男性は別段不審者を気にしていないようであり、むしろ声をかけた私に失礼な態度を取ってきた。そうした失礼な態度とその人の性格が嫌味であったため、彼の髪の毛の薄さを上空から指摘した。すると、その男性は怒りながら空を飛んでいる私を地上から追いかけて始めた。そんなこ

---

とをしても追いつけるはずはないのにと思ったところで夢から覚めた。フローニンゲン:2020/5/13  
(水)06:29

### 5823. 習字と絵画の組み合わせ

時刻は午後7時を迎えた。つい今し方夕食を摂り終えた。

今日は早朝から雨雲が空を覆っていて、雨がパラつく瞬間もあった。幸いにも夕方の今は、すっかり空が晴れ渡っていて、燦々と輝く夕日を拝むことができる。優しい夕日を浴びながら、小鳥たちが喜びの鳴き声を上げている。

音楽。音で楽しむこと。そして、音で楽しませること。心と魂で楽しみ、心と魂を楽しませること。それを常に忘れないようにする。そのようなことを午前中に思った。ここには自己へのベクトルと他者へのベクトルの双方がある。片一方だけを考慮に入れるのではなく、自他の双方を考慮に入れた創作。両者を鑑みているがゆえに、創作過程においてはそれらが意識に上がらずに、自他を超越した形で創作がなされている状態。無我無私の精神で創作物を作っていくことについて考えていた。

今日は、ドイツのアマゾンからようやくある書籍が届けられた。それは今から1ヶ月半ほど前に注文しており、コロナによる影響なのかよくわからないが、書籍が届けられるまで随分と時間がかかった。同様に、iPad Pro専用のケースについてもオランダのアマゾンに1ヶ月以上前に注文しているのだが、それについても到着が遅れている。そちらの到着も気長に待とう。

今年の夏から欧州での生活も5年目に入る。欧米での生活はこれから9年目となる。この9年間でふとした時に、漢字を味わいたい気持ちになる時がある。その時は和書を決まって読んでいた。だが今は、読書というよりも、自分で文字を書くということを行ってみたい気持ちが高まっている。そんなことから、以前にも試みたように、今日絵を描くことに加えて、アート制作用のアプリから筆を選び、それで習字を書いてみた。それが思いの外自分に響くものがあり、明日からもこれを続けていこうかと思う。

オンラインの漢字辞典から直感的に好きな漢字を選んで、それを筆で書いていこうかと考えていた。単に文字だけを書くのではなく、そこに絵画的な何かを付け加えていく。習字と絵画を掛け合

---

わせるような形で創作物を作っていこう。文字には呪術的作用が内在的にあり、文字に絵画的な要素を付け加えることによって、そうした呪術的な力を高めていくことができないかと考えていた。それについて実験をしてみよう。

オンラインの辞典からランダムに漢字を選んでいくだけではなく、継続して何かしらの漢字を書き続けてみようかと思っている。そのアイデアとしてふと、「魂癒魂育」と「慈悲創造」という言葉が思いつき、それを今夜から毎日書いていこうかと思う。

その時々自分の状態は違うことから、文字に付随させる絵画的な要素も変わってくるだろう。そうした変化を楽しみながら、同時に、それらの漢字を書き続けることによって、自分の内面にいかなる影響を及ぼすのかを観察していきたい。「魂癒魂育」の言葉の通り、自分の魂が癒され、そして育まれていくのかどうか。その漢字を毎日書き続けることによってその治癒的・変容的作用を検証してみようと思う。そのような楽しみが今夜から生まれた。フローニンゲン:2020/5/13(水)19:30

#### 5824. 今朝方の夢

時刻は午前4時を迎えた。この時間帯はまだ辺りは暗く、小鳥たちも鳴き声を上げていない。

昨日はいつも以上に早く就寝したこともあり、今朝は一度2時に目が覚めた。そこで起床しても良かったが、結局起床したのは3時過ぎだった。暗闇と静けさ。目の前にはそのような世界が広がっている。

今の気温は2度であり、今日は日中も10度までしか気温が上がらない。今日は街の中心部のオーガニックスーパーに買い物に行こうかと思っていたので、午後出掛ける際には、少し暖かい格好をしようと思う。

いつものように今朝方の夢を振り返り、今日も早速創作活動に打ち込んでいきたい。今日も試したい事柄が色々ある。夢の中で私は、日本のどこかの街の市民センターにいた。そこには大きなプールが備わっていて、どうやら今から部活のようだった。中学校時代にお世話になっていたバスケット部の顧問の先生が水泳部の顧問の先生になっており、自分も水泳部に所属しているようだった。練習が始まる前に、先生は部活のメンバーを集めて、水泳に打ち込めることの尊さについて力説を

---

始めた。その話の中で、部活の前に先生は、市民センターの1階の共有スペースでアニメを見ていたようであり、アニメの主人公の動きから水泳に活かせることを発見していたようだった。それについても色々と教えてくれた。

話の後、先生がその場を去ると、部活が始まるのかと思いきや、私の体は市民センターの休憩所にあった。そこは体育館のようなフロアになっていて、地べたに座りながらおしゃべりができるようになっていた。また、ちゃぶ台のようなテーブルもいくつかあった。私は友人たちと一緒に、そこで昼食を摂ることにした。その市民センターには定食屋があって、なぜか私はその店の厨房に入り、そこから食べ物を運び始めた。

友人たちの分の全てを1度で運ぶことはできなかったため、1人の友人に運ぶのを手伝ってもらった。みんなのいる休憩所に戻り、テーブルに食べ物を置いた。すると、誰かがワインやビールを持って来ていたようだったが、私たちはまだ中学生であり、未成年のため、お酒は飲まないようにした。

そこで夢の場面が変わった。そこからもいくつか夢を見ていた。1つには、小中高時代の女性友達が夫婦間の関係に関する悩みを自分に打ち明けて来た場面があった。私は彼女の話を真剣に耳を傾け、こちらからいくつか問いかけをしていった。その後、話の内容がデリケートなものであったので、場所を変えて、人目につかないところで話すことにした。そのような夢の場面があった。

その他にも、ある親友(YU)がバスケの選抜に選ばれ、自分も他の地域の選抜に選ばれており、自分たちの選抜チームは負けが混んでいたが、彼のチームの方は順調に勝ち進んでいるようだった。その日、ちょうど試合があり、試合に負けた後に彼と遭遇し、彼に今日の結果について聞かれたのを覚えている。それは駅のバス停前だったように思う。フローニンゲン:2020/5/14(木)04:23

#### 5825. コロナの落ち着き

時刻は午後7時を迎えた。今、優しい夕日が輝いている。今日は1日を通して肌寒かったが、こうして夕日を眺めていると、どこか温かい気持ちになる。朝と同じように、この時間帯にも小鳥たちが鳴き声を上げていて、心を心底落ち着かせてくれる。自分は本当に幸運である。このように、毎日四六時中、小鳥たちの美しい鳴き声を聞けるのだから。

---

こうした落ち着いた環境の中で自分のライフワークに取り組むことができることに本当に感謝しよう。今日も1日中、自分の心の中の音に耳を傾け、それを形にしていった。また、心の中のイメージを絵として表現していった。そうした形象的創造を通じて、自分の心と魂が大いに喜んでいることがわかる。自己の魂は、大いに寛ぎ、喜び、そして治癒と変容の歩みを絶えず進めている。

今日は夕方に、街の中心部のオーガニックスーパーに足を運んだ。行きは荷物が無いので、いつも軽くジョギングをしてスーパーに向かっている。今日もそのように軽く運動がてらスーパーに行ったところ、道中、街の美容室が開店し始めていることに気づいた。かかりつけの美容師のメルヴィンからの情報では、今月の21日から接客業がサービス再開になる予定だったはずだが、どうやら1週間早まったようだ。街中に徐々に活気が戻りつつあることを嬉しく思う。

フローニンゲンの街のシンボルであるマルティニ教会の前の広場では、週に何日間か市場が開催されているのだが、今日はそれがやっていた。実は、オーガニックスーパーで目当ての椎茸を購入しようと思ったところ、それがなく、代わりに市場で購入しようと思ったのだが、市場も今日はやっていた。明日に近所のスーパーに足を運んだ際に、オーガニックのキノコ類があればそれを購入したい。椎茸と同様に、天気の良い日に食べる数時間前に天日干しにしたいと思う。

今日はこれから曲の原型モデルをいくつか作り、明日の作曲実践の準備をする。この準備があつてこそ翌日の作曲実践である。この準備がなくても、もちろん理論書を片手に曲を作っていくことができるのだが、原型モデルから自分の曲を作っていく割合は半分ほどであり、原型モデルの必要性を感じる。これからいくつかモデルを作ったら、その後は就寝までの時間、絵を少々描きたい。

一昨日、シューマンの楽譜の巻末の添付資料に、音楽家へ向けたシューマンのメッセージがあつた。その中に、休息として散歩と詩をたくさん読むことが勧められていた。今となつては、シューマンのその意図がよくわかる。散歩と詩。自分もそれを大切に日々生きている。

今日も大変充実した1日であつた。この充実感のバトンを明日に渡していこう。そして、絶えず感謝の念を持って、いつまでもそのバトンを渡し続けていく。フローニンゲン:2020/5/14(木) 19:26

---

## 5826. 今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えようとしている。今、雲ひとつない青空が広がっていて、朝日が昇り始めている。赤レンガの家々に、朝日の優しい光が照り始めている。小鳥たちもいつものように鳴き声を上げていて、世界が透き通っているかのような印象を与えている。今の気温は1度と低いが、書斎と寝室の窓を開けていてもそれほど寒さを感じない。今、半袖の格好なのだが、早朝のヨガの実践と軽い身体運動のおかげか、身体が温まっているようだ。早朝にゆっくりとした運動を行うことによって、身体を活動に向けて準備していくことの意義を感じる。

それではいつものように、今朝方の夢について振り返り、その後絵を少々描いてから作曲実践に取り掛かりたい。今日は昼前に1件ほどオンラインミーティングがあり、それまでの時間は集中して創作活動に取り掛かる。

夢の中で私は、ある映画の中にいた。自分が映画の登場人物であることを知っており、話の展開もすでに知っていたのだが、不思議なことに、現実世界と映画の世界の差がほとんどないように感じられていた。

私は、巨大なスタジアムにいた。そこはコンサート会場になっていた。誰のコンサートかはわからないが、どういうわけか、私がオープニングの際にステージ上で挨拶がてら歌を歌うことになった。スタジアムを見渡すと、観客で埋め尽くされており、そのような数の人の前で歌ったことはなかったが、不思議と緊張感はなく、むしろ期待感で一杯だった。いざコンサートが始まった時、私はある歌を熱唱し、会場が大いに盛り上がったところで夢の場面が変わった。場面が変わる前に、ステージ上の自分に浴びせられているスポットライトがとても眩しかったことを覚えている。

次の夢の場面では、1つ前の夢の場面で現れた映画を含め、小中学校時代の友人と見知らぬ人たちと一緒に、いくつかの映画に対して投票を行っていた。どの映画が最も良かったかを投票するものである。投票を行う場所と、投票結果を吟味する場所は同じであり、日本の旅館のような場所だった。投票前の朝に、その旅館でくつろいでいたところ、2人の訪問者があった。

見ると、父方の祖父母であり、差し入れとして、新鮮な果物とお茶を持って来てくれていた。私は祖父母にお礼を述べた。すると祖父が、私が着ている服が若々しく、お洒落だと述べてくれた。実は

---

---

それはパジャマであり、しかも父から借りているものだった。その点について伝えたところ、祖父母は笑みを浮かべ、その場を静かに去っていった。

その後、祖父母からの差し入れをみんなに配り、投票会場の部屋に向かった。部屋に到着すると、そこには学校で使っていたような机と椅子が15個ほど、壁に沿って四角形の形に置かれていた。私は適当な席を選び、他の投票者も続々と部屋に入って来た。投票の司会進行役の女性が映画のタイトルを読み上げると、私たちの脳内にその映画の印象的なシーンが映し出され、それをもとに投票をして行った。私が歌っているシーンもその中に入った。

どの映画に投票するのか非常に迷ってしまう中、どういうわけか、突然強い眠気に襲われ、机に伏した。そして、机に伏すだけでは物足りず、横になりたいほどの眠気だったので、思わず机を倒し、地面に伏してしまった。そこからはもう目覚めることがなかったが、司会進行の人の声だけはかすかに聞こえていた。この夢は、夢の意識からさらに深い意識層に向かっていくことを示唆している。ここでは何かなされているのだろうか。一段と深い治癒と変容だろうか。そのようなことをぼんやりと考える。フローニンゲン:2020/5/15(金)06:15

#### 5827. 書籍の注文:マッシュルームの美味

時刻は午後7時半に近づいている。今、沈むゆく夕日を静かに眺めている。

なんとも言えないこの幸せ。今目の前に輝く夕日が贈り物のように思える。新緑の木々は夕方の優しい風に揺れ、その風には小鳥たちの声が乗っている。

絶えず幸福感と喜びを感じている日々。こうした日々を過ごせていることに感謝の念を持つ。

今日は午後に時間を作って、8冊ほど書籍を注文した。領域は多岐に渡っており、作曲理論書や楽譜に始まり、リーダーの精神分析、群衆心理学、夢分析などに及ぶ。8冊のうち7冊はイギリスのアマゾンに注文し、残りの1冊はアメリカのアマゾンから注文をした。ドイツとオランダのアマゾンも比較したが、今回はイギリスとアメリカのアマゾンから注文した方が安上がりであった。それらの書籍が到着次第、自分の関心領域の探究を続けていこうと思う。その探究の過程で得られたことを日々の

---

協働活動を通して共有していく。1人静かに探究を続け、その知見を多くの人に共有していくことをこれからも行っていく。

備忘録として、本日購入した書籍を記録しておく。

1. Leaders, Fools and Impostors: Essays on the Psychology of Leadership
2. The Age of the Crowd: A Historical Treatise on Mass Psychology
3. The Psychology of the Masses: Why You Believe What You Believe and Do What You Do
4. The Good Society and the Inner World: Psychoanalysis, Politics and Culture
5. The Handbook of Dream Analysis
6. Francis Poulenc – Works for Piano
7. Applying Karnatic Rhythmical Techniques to Western Music
8. Other Harmony: Beyond Tonal and Atonal

今日は夕方に近所のスーパーに買い物に出掛けた。もうすっかりコロナも落ち着きを見せており、確かにまだ特設の手洗い所などはあるが、もうほとんどの人がコロナを気にしていないようにすら見える。そんな中、今日はオーガニックのマッシュルーム(オランダ語「champignons」)を購入した。昨日街の中心部のオーガニックスーパーでは椎茸を購入できなかったのもので、その代わりにマッシュルームを購入することにしたのである。

自宅に帰って早速、天日干しにした。太陽のエネルギーを存分に吸収してくれと願いながら天日干しをし、マッシュルームも太陽の光を浴びて喜んでいるように思えた。その様子に喚起され、1曲ほど曲を作った。

先ほどマッシュルームを味噌汁に入れて食べてみたところ、その美味に驚いた。椎茸も良いコクを出していたのだが、マッシュルームには良い香りと歯応えがあった。今後も基本的には椎茸をキノコ類の中心に摂取していこうと思っているが、時にマッシュルームを食べてもいいかもしれないと思った。本日購入したマッシュルームは意外と量があり、天日干しにすると日持ちもするのでゆっくり食べていこう。

---

椎茸と同様に、マッシュルームも天日干しにすると栄養価が高まる。椎茸を食べる際に、石づきのみ捨てて、軸は食べている。実際には石づきもすぐに捨てるのではなく、何らかの旨味が出るであろうから、3日に1回作るベジブロスに入れている。キノコ類の軸には栄養が豊富とのことであり、それも残らずいただくことを大切にしている。明日もまた天気が良いようなので、マッシュルームを天日干しにし、彼らが喜ぶ姿を見よう。彼らをいただくことによって、自分の腸内細菌たちも喜ぶはずだ。フローニンゲン:2020/5/15(金)19:35

## 5828. 書斎の眺めと光の共有

時刻は午前6時を迎えようとしている。今朝は少々雲が多いが、それでも雲の隙間から朝日が地上に差し込み始めている。外は肌寒いが、書斎と寝室の窓を開けて、新鮮な空気を取り入れている。私が窓を開けるのは、何も新鮮な空気を部屋に取り入れようとするからだけではない。それよりも、小鳥たちの鳴き声をよりよく聞きたいからである。今この瞬間も、小鳥たちは朝の挨拶をしている。彼らの鳴き声を聞きながらヨガをし、座禅瞑想をし、そしてこのように日記を執筆している。彼らの鳴き声は、絶えず自己落ち着かせ、心をより一層平穏なものにしてくれる。そうした心を持って、今日もまた創作活動に取り組んでいこう。

昨日、アメリカとイギリスのアマゾンに少々書籍を注文した。毎月少しずつ書籍を購入し、自分の関心事項に関する探究を進めている。来月も今月と同様に、書籍を少々購入する予定だ。今月はフィッシャー教授の追悼論文集を購入することはなかったもので、来月それを購入したい。

今朝方も夢を見ていたが、今朝の夢はそれほど印象に残っていない。夢の中の登場人物として日本人の友人か知人か、あるいは見知らぬ人が出て来ていたのは覚えている。夢の中で話している言葉は日本語だったことも確かだ。だがどこかのタイミングで、英語を話す瞬間があったことも覚えている。肯定的でも否定的でもないような感覚を引き起こす夢だったが、どちらかを選べと言われれば、肯定的な方に寄った夢だったように思える。今朝は無意識の世界が落ち着いていたようだ。

書斎からの眺め。私は1日のうちのほとんどの時間を書斎で過ごしている。書斎の窓はとても大きく、開放的な窓から見える景色は格別だ。いつも書斎から同じ景色を眺めているようでいて、そこには多様性が溢れている。窓の外に映る景色は毎回異なるのだ。自分も世界も絶えず変化している

---

がゆえの多様性がそこにある。自己も世界も変化に富む。どちらも共に変化の恩恵を授かりながら、ゆっくりとどこかに向かって動いている。この発想は幾分目的論的だろうか。そうだとすると、この変化にはやはり何かしらの方向性があるように思えるのだ。自己も世界も本質的にはただそこにあるだけなのかもしれないが、そこに方向性を見出そうとするのは人間のさがなのだろうか。認識にはそうした傾向があるらしいが、そもそもそうした傾向が人間に備わっているということは、やはり自己もこの世界も方向性を内在的に持っているのではないかと思えてしまう。

ゆっくりと昇る朝日。朝日が赤レンガの家々を照らす時間まであと少しだ。

光。そういえば昨日は、光を与えることについて考えていた。そして光に関して思いを巡らせていると、自分の実家がある山口県光市で長く人生を過ごした意味について考えていた。

詩人の大岡信はかつて、「土地の名前はたぶん 光でできている」と述べていた。今ならその意味がよくわかる。土地には固有の土着紳が宿っていて、その土着紳が光をもたらしているのだ。そしてそれがその土地の名前になり、固有の風土がそこに出来上がる。そのようなことを考えながら、町の名前が「光」である場所で幼少期・青春期を過ごすことができた恩恵について考えていた。私はあの町から多大な光を授かりながら成長していったように思う。故郷の町が自分に対して行ってくれたのと同様に、自分も何かしらの手段と方法で、光を世界に共有したいと思う。フローニンゲン:2020/5/16(土)06:16

#### 5829. 死後の世界に思いを馳せる体験:今よりもずっと遠い場所へ

時刻は午後7時半に近づいている。今日は1日を通して曇りがちであった。気温も低く、窓を開けていると肌寒かった。今この時間帯も空にはうっすらと雲が覆っていて、夕日がかすかに差し込むほどだ。今日は午後に、カート・フィッシャー教授の追悼論文集を購入した。一昨日に書籍を一括注文した際には本書を購入しなかったのだが、少し気が変わり、来月まで待つことなく本日それを購入した。

ちょうど明後日の月曜日から、協働者である有馬充美さんと一緒に行っている「一瞬一生の会」の第2期が始まる。本書の購入を早めたのは、この会の学習コンテンツをより充実したものにしたいと思ったからでもある。本書に収められている論文の中で重要な事柄を述べているものについては、

---

---

それを補助音声教材として何か話をしようかと思う。本書のような専門書を読みこなすのは、その道の専門家でないとなかなか大変であろうし、自分も読んだ内容をしっかりと定着させたいこともあり、書籍が到着次第、いくつか音声ファイルを作っというかと思う。

今日の午後に仮眠から目覚めた際に、不思議な感覚に包まれた。ここ最近仮眠後に時折、自分がいなくなった後の世界について考えることがある。さらには、死後の自己について考えることがある。今日もまたそのような体験をした。それは時間として短いのだが、今この瞬間に自分がここにいることが不思議に思えてしまう感覚であり、その感覚を得た瞬間に、自己が自己を超越していく感覚がある。一抹の哀しさや詫びしさのような感覚もそこに混ざっており、その体験後はなんとも言えないような感覚になる。こうした現象が起こるようになったのは、昨年頃からぐらいかもしれない。一体この体験は何を示唆しているのだろうか。

午前中にふと、青空の向こうに輝く星々に思いを馳せていた。常にそこにある星々。それはどこか、常にそこにいる人々と同じようなものなのかもしれない。充実感も幸福感も、そのような形で常にそこにあるのだろう。そこというのはここでもある。そこはここであり、ここはそこなのだ。

今日もまた創作活動に明け暮れる1日であった。今日は創作活動だけではなく、協働プロジェクト関係の仕事も行った。そうした観点において、二重の意味で充実していたように思う。心の中に浮かんでくる詩のように短い音楽的なものを絶えず形にしていくこと。それを今日も行っていた。それが音楽的な自己の発見と創造につながっていく。内側に流れている音楽的な感覚をとにかく形にしていくことによって、自分の内側の音楽的な何かを発見し、より豊かに育んでいくことができる。明日もまたそれを行っというかと思う。そのようにして自分は、今想像している場所とは全く違った場所にいるだろう。今想像しているのよりも、遥かずっと遠くの場所に自分はいる。フローニンゲン：

2020/5/16(土) 19:38

### 5830. 今朝方の夢

時刻は午前6時を迎えた。小鳥たちの清澄な鳴き声があたりにこだましており、朝日が赤レンガの家々に光を届けている。小鳥たちの鳴き声と同じような静かで優しい心を持ち、そして朝日が地上

---

に光を届けてくれているように、今日も自分の取り組みを通じてこの世界に少しでも光をもたらすことをしたい。

今日からは再び晴れの日が続くようであり、気温も上がる。今日の最高気温は18度、最低気温は6度であるから、とても過ごしやすそうだ。来週には20度を越す日もあるようなので、暖かさを感じることもできるだろう。

昨日は印象に残る夢を見ていなかったが、今朝方は幾分印象的な夢を見ていた。それについて書き留め、本日の創作活動に入っていこうと思う。

夢の中で私は、国としてはおそらくオランダにいて、非常に入り組んだ駅の構内にいた。雰囲気から察するに、空港駅のような感じである。駅に到着すると、これから始まるバスケの試合会場に向かった。だが駅の中は本当に複雑であり、目的地に辿り着くのは至難の技のように思われた。すると私の横に、高校時代にテニス部に所属していた友人がいることに気づいた。彼はどうやら目的地までの行き方を知っているようであり、彼についていく形で試合会場に行こうと思った。

自分が出場する試合が開始されるまでに2時間近く時間があり、随分と余裕があったが、早めに会場に入っておこうと思った。試合会場に行く前に、私は飲み物が必要だと思い、友人にどこかで水が買えないかと尋ねた。すると友人は、水が買える店まですぐに案内をしてくれた。

店に入ると、友人は「本当に水でいいの？」と尋ねてきた。彼はやたらと私に、ペットボトルに入った清涼飲料水やコーヒーを勧めてきたが、それらの商品には精製された砂糖が入っており、身体と脳の機能を弱体化されるため、水でいいと私は答えた。それじゃあということで、友人が水のペットボトルを取ってきてくれた。見るとそれはボルヴィックの水であり、容量は2Lのものであった。

私は別にボルヴィックの水に不満があるわけではなかったが、他のメーカーの水も一応確認したいと思い、水売り場に行って自分の目で商品を確認した。そこで改めて、ボルヴィックの水が良さそうだったのでそれを購入することに決めた。レジに水を持っていき、支払いをしようとする、レジ係はインド人の中年男性だった。どうやらその店の店長のような感じだった。

---

クレジットカードを受け付けているかを確認し、大丈夫そうだったので、私はカードを手渡した。すると、カードの読み取り機が少し変わっていて、カードを挿入した後に、カードの番号を打ち込み、自分の名前と住所を打ち込まないといけない面倒なものだった。店でカード番号を打ち込んで買い物することなどこれまでなかったので、私は番号を打ち間違えてしまった。しかし私はそれを、アメックスのカードを受け付けていないのかと誤解してしまい、代わりにマスターカードを渡そうとした。ところが私は、クレジットカードではなく、間違っ、アメリカ時代に使っていた銀行が発行するデビットカードを渡してしまった。もうその銀行口座は閉じているので、預金残高などないはずなのだが、なぜか支払いができてしまった。それを不思議に思いながら、一応レシートをレジ係の男性から受け取った。

レシートを見ると、一瞬私は目を疑った。2Lの水の値段が税金込みで7.33ドルだったのだ。随分と高いなと思ったところ、ひょっとするとコロナの影響で水の生産と搬送が滞っており、それゆえに価格が高騰しているのかもしれないと思った。一方の清涼飲料水などは大して値段が上がっておらず、不思議に思った。友人は、「でしょ。水は高いんだよ。だから清涼飲料水やコーヒーを勧めたんだ」と述べた。しかし私は、自分の心身の状態を最良のものに保つためであればお金など気にしておらず、また1.5ドルから2ドル払って心身を蝕む毒を飲むよりも、7ドル払ってまともなものを飲んだ方がいいと友人に伝えた。すると友人は黙った。

水の値上がりはコロナの影響なのか気になったので、駅構内にある日本のスーパーにも立ち寄ってみることにした。そこでは軒並みたいていの商品の値段が上がっており、その中でも水の値段が高くなっていた。中には10ドルを越す水のペットボトルがあり、ちょっとしたテーブルワインかと思うぐらいであった。念のため弁当類なども確認してみたところ、価格は軒並み高騰していた。だが、1.2ドルで買える格安の弁当があり、私の目からすると、それはもう材料の質が劣悪なものであることが容易に推測された。見た目だけはいいのだが、中身が杜撰な弁当が平然と売られていることに私は少し嫌悪感を覚え、その店を後にした。店を後にすると、もう友人の姿は見えなくなっていた。そこからは自分1人で試合会場に向かう必要があった。

歩く歩道に乗って移動し、途中でそれを降りて、スポーツショップの前を通ろうとしたところ、見覚えのある顔がそこにあった。そこには、現在スペインで活躍するサッカー日本代表の若手の選手がいて、私たちは顔見知りのものであり、その場で再会を喜んだ。彼はとても元気そうであり、何やら今夜

---

アウェーで大一番の試合があるとのことだった。何時からキックオフなのか聞いてみたところ、まだ不明とのことであり、彼は随分と呑気そうにしている、こうした心の余裕が良いプレーにつながっているのかと思った。自分の用事を済ませたら、今夜彼を応援しにスタジアムに行くことを約束し、私は彼と別れた。そこから少し迷いながらもなんとか試合会場の前に到着した。試合開始までまだ1時間ぐらいあるようだった。

会場の前には、大学時代に第二外国語で同じクラスだった友人がいて、彼とその場で話をして時間を潰すことにした。すると彼が、私の家が近いのだから、私の家でゲームでもして時間を潰そうと述べた。会場から私の家までは大して近くなく、歩いて往復1時間かかるので、これから家に行っても何もしないですぐに引き返すだけだと述べた。すると彼も納得したようであり、そこからは引き続きその場で話をすることにした。

そのような夢を今朝方見ている。実際にはその他の場面もあったように思う。水を購入する際に、レジの係員ともう少し英語で何か話をしていたように思うし、別の場面でも英語で話をしている自分がいたように思う。フローニンゲン:2020/5/17(日)06:38

### 5831. 皮膚感覚の鋭敏化

時刻は午後7時半を迎えようとしている。今は雲が全くなく、夕日が燦然と輝いている。爽やかなそよ風がフローニンゲンの街を駆け巡っている。今日もまたゆったりとした時が流れ、気がつけばこの時間になっていた。小鳥たちのさえずりが、どこか小川のせせらぎのように聞こえ、それを聞きながら創作活動に没頭する1日であった。

今日の午後に仮眠を取った際に、昨日の仮眠の時と同様に、目覚めた直後に不思議な感覚があった。昨日のそれよりも爽やかではあったが、それにしてもこの感覚は一体なんなのだろうか。わずか20分ほどの仮眠によって、自己が確かに一歩超越の道を歩いているように思えるのだ。仮眠の最中には即座に深い意識状態に陥り、それにより治癒と変容が確かに起こっていることを実感する。

先日注文した夢分析に関する書籍が届いたら、その書籍を片手に夢を様々な観点から探求しようと思う。ひよっとすると、仮眠における体験を分析する際にも使えるかもしれない。こうした探求に

---

加えて、夢を題材にして曲や絵も作っていこう。夢は顕在意識からでは決して得られない洞察をもたらしてくれる。そしてそれは、創作活動の貴重な題材となる。

ここ最近では仮眠における一風変わった体験だけではなく、倍音のせいだとは思いますが、作曲中に時々聞こえない音まで聞こえてくることがある。確かに、1日に10時間以上は作曲実践をしているので、そうした投入量の実践をしていけば、感覚変容が起こるのも何ら不思議ではないが、この体験も非常に興味深い。鼓膜の内奥が特殊な形で振動し、非常に神秘的な音を知覚する体験である。昨日と今日にもそれがあった。以前にもこれと似たような体験を時々していた。

私たちは、音を捉える際に、全身、とりわけ皮膚から音を感知している。文字通り皮膚を通じて音楽を聴くために、皮膚感覚も涵養する必要がある。そのようなことを考えていると、この1年半、皮膚に人工的な刺激を与えず、皮膚感覚を養うことをしてきたことが上記の体験と関係しているかもしれないと思った。具体的には、この1年半の間、私は一切シャンプーや石鹸などを使っていない。また、食器を洗う際も当然ながら洗剤などを使っていない。そもそも洗剤を使わないと落とせないような汚れを生み出す食べ物を食べていないのだ。

何かこうした生活習慣によって、本来持っていた皮膚感覚が目覚めつつあるように思える。そして、こうした生活習慣を続けていくことによって、皮膚感覚がますます鋭敏なものになっているように思う。皮膚感覚を研ぎ澄ませていく実践及び生活習慣については今後も継続していこう。それによって上記の体験の頻度と度合いがいかように変化していくのかを観察していこうと思う。フローニンゲン:2020/5/17(日)19:41

#### 5832. 移ろいとしての自己と移ろい性の背後にあるもの:英語学習について

時刻は午前4時半を迎えた。今朝の起床は午前4時前であり、そこからしばらくすると、小鳥たちが静かに鳴き声を上げ始めた。今も彼らの鳴き声は控えめであり、清澄なさえずりが辺りに響き渡っている。この時間帯になると、空はもうダークブルーに変わり始めている。長い冬の時代においては、空がダークブルーに変わり始めるのですら午前8時を回ってからの時もあったぐらいだ。それを考えると、随分と早くなったものである。

---

闇の時間帯が短くなり、光の時間帯が長くなること。それは1人の人間の一生涯においても見られる現象だろう。一生涯だけではなく、より短いスパンで、年単位や月単位でもそうした現象が見られるかもしれない。また、私たちの時代にも多分にそうした現象を見出すことができるだろう。

今は闇が長い時間なのか、それとも光が長い時間なのか。闇から抜け出す方法だけを考えるのではなく、闇がやってくるのは不可避なのだから、闇との付き合い方を私たちは学ばなければならないのではないだろうか。これまで散々と闇から逃げようとしてきた結果が今の社会に顕在化し始めている。そのようなことを思う。

先日友人のブログを見たときに、自己の存在に関する言及がなされており、それを大変興味深く読んでいた。先ほどもその点について考えていた。端的には、連続的な移ろいとしての自己というテーマであり、表象現象としての自己というテーマでもある。

有としての無、あるいは無としての有から絶えず移ろいとしての自己が立ち現れてくること。今こうして日記を書いているのもそうした移ろい現象的な自己なのかもしれない。一方で、夢を見ない深い眠りの状態においては、そうした移ろいとしての現象なる自己すらも表象されることをやめ、有としての夢の世界にまるで同化するかのように静かにそこに存在かつ非存在している。

この「存在かつ非存在している」という点がとりわけ重要なのではないかと個人的には思う。自己は連続的な移ろいとして存在するという性質も持っているながらも、非存在している、あるいは非存在できるという性質も持っている。この点はとても興味深い。

移ろいとしての自己について考えていると、諸々の過去の思い出も移ろいとしての現象だったのだとわかり、それらの記憶を単に移ろいとして片付けてしまうと何か物寂しい感じになった。おそらくこの物寂しさの感覚が大切なのであり、1つ1つの現象には移ろい性を超えた何かがあるような気がしている。1つ1つの移ろいの背後にある何か。それらは究極的には1つのものと繋がっていて、それと自分がつながるためには、それぞれの現象を移ろいとして認識するだけではなく、それらの背後にあるものを見ようとする意思が必要なかもしれない。物寂しさの感情は、やはりそうしたものが背後に存在していることを示唆してくれていたように思う。

---

また、オランダに住む別の友人を昨日読んでいたときに、英語学習に関する言及があった。英語学習に関しては私もこれまで色々なことを試し、うまくいったこととうまくいかなかったことの双方を多く経験している。英語のどのような力を高めたいのかによって学習方法や実践方法は当然ながら変わるのだが、仮に聴く力と話す力を高めたいのであれば、個人的にはアメリカかイギリスのテレビドラマを視聴するという実践が最も効果があるように思える。

もちろん、学習というのは直接体験の度合いが高まれば高まるほど、学習効果が高まるという性質があり、効果が高い学習方法は実際に英語のネイティブスピーカーと毎日話すことだと思うが、それが難しい場合も多いであろうし、私たち1人1人は固有の意味世界と言語体系を持っているので、複数のネイティブスピーカーの発話に触れ、さらには彼らが実際に生活しているコンテキストまで体感できるという点において、テレビドラマは優れていると思う。

実はアメリカの大学院に留学していた当初は、私は英文書籍と論文ばかりを読んでおり、英語を聴く力と話す力はそれほど高まらなかった。留学を始めて随分してからそれに気づき、そこからアメリカのテレビドラマを見始めたことによって、着実に聴く力と話す力が高まってきた。そもそもこの学習方法を採用しようと思ったのは、前職時代の中国人の女性の上司があまりにも流暢な日本語を話すので、日本に留学したことがあるのかと尋ねてみたところ、留学経験はなく、中国にいるときに日本のテレビドラマをよく見ていたと述べていたことがきっかけだった。日本語はテレビドラマから学んだとさえ言えるくらいによく見ていたそうであり、その効果が非常に高いものであることに驚いたことを覚えている。

アメリカのテレビドラマは、相当な制作費をかけられて作られているものが多く、一話一話が小さな映画のようにさえ思えるくらいのクオリティを持っているものも多い。オランダにやってきて研究生生活をしているときにも、アメリカのテレビドラマのDVDやブルーレイを毎日1、2話は視聴していた。今はAmazon Primeの会員であるから、そこからアメリカのテレビドラマを毎日1、2話は視聴し続けている。懐かしのアニメも英語で見ることなども過去に行っていたし、今でも英語で日本のアニメを見ることもある。

今はもちろん英語力を向上させるためにドラマやアニメを見ているのではなく、純粹にコンテンツとして面白いということがあり、それに加え、やはり自分の知らない世界を垣間見させてくれるという意

---

味で、内面リアリティをより拡張させ、豊かにしていくという意味でそれらを視聴している自分がいるように思う。いずれにせよ、アメリカ時代を振り返って思うのは、もっと早くから英語のテレビドラマを継続して見続けていたら随分と聴く力や話す力は違っていただろうということだ。フローニンゲン：  
2020/5/18(月)05:10

### 5833. 物を無駄にしない心

時刻は午前5時を迎えた。辺りは随分と明るくなってきた。小鳥たちのさえずりもより元気の良いものになった。

先ほど、昨日の夕食時に使ったサランラップが台所に置きっぱなしになっていることに気づいた。いつもは夕食後の洗い物の際に捨ててしまうのだが、それが捨てられずに残っていた。少し静かにサランラップを見つめていたところ、もしかしたらもう一回使えるのではないかと思った。サランラップを容器にかけ、それを外して、一回使っただけで捨ててしまうのは何かもったいないように思えたのだ。

昔から物を無駄にしないという精神があり、それは特に食べ物に関しても現れている。毎日食べる野菜の切りクズは捨てずにベジブロスとして活用したり、毎日食べるバナナに関しても、それがオーガニックなものであるがゆえに、皮に付着している実の部分まで残らず食べるようにしている。

昨年実家に帰ったときに、私が皮を剥いてすぐにそれを捨てるのではなく、皮に付着した実からまずバナナを食べている姿を見かけた両親が驚いていたのを覚えている。皮に付着した実の部分にこそ食物繊維が豊富なのだと力説し、それを捨てるのはもったいないと説明したところ、父も私と同じように皮に付着した実を食べるようになり――私はそれまでは豪快に皮に付着した実に直接かじりついてしたが、父からスプーンを使うと綺麗に取れることを教えてもらい、今ではスプーンを使って綺麗に実をすくっている――、母は私にその部分をくれるようになった。

その他にも両親に笑われたのは、以前まで両親はネスプレッソを使ってコーヒーを入れており、カプセルを1つ設置し、ボタンを一回押しただけで大抵の人はそのカプセルを捨ててしまうが、微量に抽出されるボタンを再度押すと、まだコーヒーが絞り出されることを私は知っており、そのような形でコーヒーを入れていると、新しい発見だと言って両親が笑いながら驚いていたのを覚えている。

---

---

そういえば幼少時代においては、オレンジを食べた後の種がもったいないように思えて、それを鉢に植え、引越しに伴って父方の祖父に預かってもらい、代わりに育ててもらっていた。なんと今でもそのオレンジの木は父の実家にある。また、私は大の梅干し好きであり、今では食べる機会は減ったが、小さい頃にはよく梅干しを食べていた。ある日、梅干しの種の中に何かあるのではないかと思い、歯で種を砕いてみたところ、そこにも果肉のようなものがあって嬉しくそれを食べていたのを感じている。

その記憶をもとに、昨年アボカドの種の中を調べようとして歯で砕こうとしたところ、あまりにも硬すぎてうまくいかず、さらにはアボカドの種には栄養があるとのことだったので、ベジブロスにした後の種を食べてみたところ、苦味が強く、それ以降食べるのはもうやめにしたのを感じている。その他にも、昨年からコーヒー豆を専門店で選び、コーヒーミルを使って自分の手で豆を挽くようにしており、コーヒーの残りカスについても脱臭剤に使ったりしていた—カップに入れたコーヒー豆を冷蔵庫の中に入れて脱臭剤にして使っていたところ、長く放置しすぎてしまい、カビが生えており、コーヒー豆にもカビが生えることを知ったのは嬉しい発見であった—。

こうした例を挙げればキリが無いが、その他に食べ物や飲み物を無駄にしないという点で言えば、昨日洗い物の際に洗剤を使う必要がないと言及していたこととも関係している事柄を思い出した。私は、例えば朝に大麦若葉のドリンクを飲んだ後やカカオドリンクを飲んだ後には、コップの内壁に付着しているものを無駄にしないために、水を少々入れ、スプーンを回してそれらを残さず飲むようにしている。

夕食時においてもそうであり、夕食時には、ジャガイモを温めてそこにチーズを入れて溶けるのを待つための容器、サツマイモを温めてそこにオリーブオイルを加えて食べるための容器、そして味噌汁用の3つの容器があり、全てのもを食べ終わったら、1つの容器に水を少々入れ、内壁の残留物を綺麗に溶かし、その水を2つ目の容器に移し、同じことをした後3つ目の容器に移す。その後、晴れてそれを飲み干してから洗い物を始める。その際にはもう3つの容器は随分と綺麗な状態であり、洗剤など使う必要が全くなく、さっとスポンジで水洗いすれば十分である。

その他にも、物を無駄に使わないという点においては、流石に外出後は手を洗うが、自宅にいる際には、トイレに行っても使った部分しか洗わないようにしている。雑菌がどれだけ飛散し、身体の上

---

でどれだけ移動するのかについては調べてみないといけないかと思うが、使っていない手のひらや甲を洗う意味がよく分からず、今でも使った手の使った指しか洗わないようにしている。台所のサララップを静かに眺めながらそのようなことを思い出していた。フローニンゲン:2020/5/18(月)

05:32

### 5834. 今朝方の夢

まろやかさを持った朝の空。ちぎれ雲が少々空に浮かんでいて、それが薄ピンク色に染まり始めている。

今日はいよいよ、「一瞬一生の会」の第2期が始まる。その始まりが今から楽しみであり、今回からは、こちらの方で補助録音教材という形で、成人発達理論に関して色々と話をして行こうかと思っている。自分が読んだ論文や書籍、さらには最近の自分の実験や実体験などを交えた話をしていければと思う。今日は初回のクラスであり、それが終わると、以前お付き合いのあったグローバルコーチングさんにお声掛けいただき、今日はあるオンラインワークショップに招待していただき、それに参加することになった。

「一瞬一生の会」と時間が重なっているため、全てには参加できないが、ワークショップの途中から参加できればと思っている。今日こうしたイベントがあり、それ以外の時間はいつもと変わらずに創作活動に打ち込んでいこうと思う。その前に、今朝方の夢について振り返っておこう。

夢の中で私は、小中学校時代の2人の男性の親友(YU & KF)と、1人の女性友達(AS)と話していた。いや、4人で話をする前に、まずは体育館で2人の男性の親友たちがカラオケコンテストに参加している場面があったのを思い出した。

ステージ上に2人が立ち、いざ歌を歌い始めると、また違う2人の後輩グループがステージ上に立ち、そこからまた違う2人のグループがステージに上がってきて、結局3つのグループが同時に違う曲を流して歌い始めた。正直なところ、3つの曲を同時に聴くのは難しく、彼らもまた歌いにくそうにしていた。その後、私は女性友達に勉強を教えていた。主に数学を教えていたように思う。彼女は高校を卒業したはずなのだが、私は彼女に高校数学を教えており、ひょっとしたら途中で学校を辞

---

めたのかもしれないと思った。彼女の勉強に取り組む姿勢を見ていると、もう一度高校に入学して勉強しようとする意思のようなものを感じた。

勉強がひと段落すると、昼食の時間となり、4人で近くのレストランで食事をするようになった。昼食を食べ終わったら、午後から学校に行くのをやめて、どこかに遊びにいかうかと話し合った。また、後日どこかに遊びに行く計画についても話し合った。明日は午後から学校に行くのをやめて、近くの山をハイキングするのはどうかと提案したところ、3人はそれを名案だと言い、明日はハイキングをすることにした。そのような夢を今朝方見ていた。

近日中に届くであろう夢分析の書籍を参考にしながら多角的に夢を探求して行こうと思う。また、夢が与えてくれた固有の感覚については、それを曲や絵として形にしていこうと思う。フローニンゲン：  
2020/5/18(月)05:51

#### 5835. 「損害賠償」という言葉と国道のサバに関する記憶

先ほど夢について振り返り、すでに日記を少々綴っていた。その後、絵を少しばかり描いたので、作曲実践に取り掛かろうとしたところ、ふと昔の何気ない記憶が蘇ってきた。夢を思い出してそれを書き留めるだけではなく、昔の記憶についても思い出したことがあれば、それを書ける範囲で書き留めておくことも何か意味があるのではないかと思った。

先ほど思い出した記憶というのは、私がまだ3歳の頃の記憶であった。その時はまだ吉祥寺に住んでいて、ある日母が出かけるために、江東区に住む母方の祖母が子守にやってきてくれた。祖母が来てくれたことを私は嬉しく思ったのだが、家の扉を開けたときに祖母がいたことに驚き、冗談でそれは「無断侵入(不法侵入)」だと述べて、後々になって笑い話として、その言葉にショックを受けたということを祖母から聞いたことがある。「江東区からわざわざ洋ちゃんの子守のために吉祥寺まで行ったのに、いきなり無断侵入と言われてビックリしたわ～」と関西弁訛りの言葉で言われたのを覚えている。

実は子守に来てもらったその日、私は祖母から「損害賠償」という言葉について教えてもらっていた。3歳の子供にふさわしい話題かどうかかわからず、またどうしてそのような話題になったのか不明だが、線路への飛び降り自殺が一番不幸な死に方であるということを祖母から教えてもらった。不

---

幸というよりも、残された家族に迷惑がかかるというようなことを教えてもらっていたように思う。そのときに、「損害賠償」という言葉が出て来た。線路へ飛び降り自殺をした場合には、鉄道会社から家族に損害賠償が請求されるということを聞き、残された家族にも鉄道会社にも迷惑がかかるというような話が印象に残っていた。

実はそれ以上に印象に残っていることがあり、それは私の関心を大いに引いた。線路に飛び込んだ際に人体が列車に巻き込まれるという現象があるらしく、その現象に興味を持った自分がいた。それは少しばかり危ない関心であることは幼い頃の私もなんとなくわかっており、誰にも言わない形でその関心を持ち続けていた。

その後私は、小学校2年生の春に山口県に引っ越した。まさに今朝方夢に出てきた親友(YU)とある日学校から帰っていると、魚屋の前にサバが落ちていた。それを見た瞬間に、「これだ！」と私は思った。3歳の時に祖母から列車の巻き込み現象について教えてもらい、どうしてもそれを実験して検証してみたかった私は、サバが地面に落ちている姿を見てとても喜んだのである。そのサバを使えば、擬似的に巻き込み現象の実験と検証ができると思った。

親友にその案を伝え、早速私たちは、サバを国道に置いた。その国道を走るバスを列車に見立て、そのサバを轆かせてみることによってサバがどうなるかを検証してみようと思ったのである。

遠くの方からバスがやってきたときのあの興奮。そしてバスに轆かれたサバが見事に車輪に巻き込まれた瞬間、その光景を見て、親友と私は大はしゃぎしたのを先ほどふと思い出した。

そこから私は、「損害賠償」という言葉から、さらにまた別の記憶について思い出していた。小学校4年生の時、法律を学びたくなったので父に相談したところ、それじゃあということで、近所の本屋に行って法律関係の本を買ってくれと述べた。早速本屋に向かい、その道中、父から色々と問いを与えてもらった。まずは主要な法律分野に、「民法」「刑法」「商法」があると教えてくれ、その3つの中から小学校4年生の私が何を最初に学ぶのがいいと思うかを私に問いかけてくれた。

私は直感的に刑法から学ぶのが良さそうだと思い、それを伝えたところ、刑法の事例は小学校4年生の私でも比較的想像しやすいという点と、民法や商法は改正が多いという点を考慮すると、確かに刑法から学ぶのが良いという結論になった。そして本屋に到着し、「刑法入門」という文庫本を

---

---

買ってもらったのを覚えている。私は大学に入学するまでほとんど本を読まない人間であったこともあり、その本は印象に残っている。中学校に上がり、中学1年生の時に、朝の読書時間にその本を読んでいたのを覚えている。

私が山口県で過ごした場所は相当に長閑な場所であり、自然がとても豊かだった。その代わりに、大型の書店などはなく、進学塾などもなかった。そんな環境の中、父と同じ大学に行こうと思っていた私は、小学校4年生の時にはすでに志望大学が決まっており、中学校に上がったぐらいの時に志望大学の赤本を母にお願いして買ってもらっていたことも思い出した——記憶をより整理すると、中学校2年生の時に浮気をして、京都大学に行きたいと思い、京大の赤本もその頃に購入してもらったのを覚えている——。

私が住んでいたのが中国九州地方であったこともあってか、毎年九州大学の入試問題が新聞に掲載されており、中学生ながらも九大の入試問題を隅から隅まで眺める癖があったのを覚えている。そしていくつかの問題に正解できる自分がいて、少々嬉しくなっていたのを覚えている。新聞に掲載されたセンター試験に関しても同じことを中学生の時にしていた。そんな記憶が蘇ってきた。

それ以外にも、また別の記憶が蘇ってきた。それもまた小学校低学年の頃のものである。山口県に引っ越した翌年ぐらいの頃だったから、あれは小学校3年生ぐらいの出来事だろうか。その時はまだ父は喫煙をしており、ある日の夜に、夕涼みがてら近所の酒屋にタバコを買いに行くのについていったことがあった。

自宅からその酒屋までは歩いてすぐの距離であった。社宅の目の前には公園があって、公園の前に差し掛かると、そこで父がふと、「公園を斜めに直線に進んでいくのと、公園の外側を回って行くのとではどちらが近いと思う？」と微笑を浮かべて尋ねてきた。小学校3年生の私の目には、外側を回って歩く方が近いと思われたので、私はそちらの道を選び、父に公園を斜めに進んでもらうことにした。その時、歩く速度を同じにしないと比較できないからということ、お互いに歩く速さはこのくらいと約束していざ歩き始めた。

すると、私の予想とは違って、父の方が早くゴール地点に辿りついた。そこで父は、先ほどの微笑よりもより笑顔になって、「三角形の2辺の和は、他の1辺よりも長いのだ」と述べた。その後、酒屋に向

---

かうまでの道中、その意味について教えてもらい、「なるほど、だから公園の2辺を回った自分の方が遅かったのか」と合点したのを覚えている。

母に関する記憶については何も言及しなかったが、私は両親から直接体験と問いを通じて、随分と色々なことを教えてもらっていたのだと改めて思う。また私は、2人から何かに打ち込むことや学ぶこと、そして生きることについても言葉を介在させることなく2人の生き様から多いに感化されていたのだと気づく。気がつけばもう朝の7時だ。これから作曲実践を始めよう。フローニンゲン:2020/5/18 (月)07:18

### 5836. 受験の失敗に関する記憶・算数/数学に関する記憶と思い出

あまり思い出したくない記憶。そして、ふと思い出されてしまう記憶。人間の無意識にはそのような記憶が格納されている。

今、協働しているある会社さんは興味深いことをメンバーに提供していて、それは自分の家族構成から始まり、ライフヒストリーを詳細に思い出すことを通じて、今の自分がどのように形成されたかを振り返るものだ。その会社のメンバーの方々の振り返りレポートを見て大変興味深いと思ったのだが、自分ではあまり過去の記憶について振り返らないようにしていた。しかし、今朝方にふと、夢と同様に、覚えている範囲の記憶の中で、書ける範囲のことを文字として書き出してみるというのも何か意味があるように思えた。そうしたことから、先ほど過去の記憶について書き出していた。それがひと段落し、そこから作曲実践を始めようとして、作曲ソフトを立ち上げた時に、またしても過去の記憶が蘇ってきた。

今から作ろうとしていた曲の第一音を何にしようかと考えようとした瞬間に一連の記憶が蘇ってきた。私は幼少時代、迷路を書くことが大好きであり、よく没頭してノートに迷路を書いていた。書いた迷路を自分で解くわけでもなく、また友達に見せて解いてもらうのでもなく、ただただ迷路を書くことが好きであり、虫眼鏡を使わないと見えないほどの緻密な迷路を書くことに没頭していたのを思い出した。そこから20年以上経って、私はニューヨークに生活拠点を置き、ニューヨーク州とニュージャージー州の進学塾で算数や数学を日英バイリンガルの子供たちに教えていた。教え子の中に、お母さんが医者のお息子さんが出て、彼が私と同じように迷路を書くのが大好きのようであり、「先

---

生、こんなのできたよ。ちょっと解いてみてよ」と彼が迷路をよく私に見せてくれていたことをふと思い出した。彼の迷路もまた緻密であり、それは共通である一方で、彼は人に自分の迷路を解いてももらうことにも喜びを感じているようだった。迷路を書くことに没頭する人間が自分以外にもいるのだということを知ったこともその時の喜びの1つだった。

そこからまた別の記憶に向かった。先ほどの日記の中で、志望大学がすでに小学校4年生の時に決まっていた、赤本を中学生の時に買ってもらっていたことについて言及していたように思う。そこからまずは中学校の卒業式の日について思い出していた。

繰り返しになるが、私が住んでいた場所は自然豊かな田舎であり、周りの友人で大学に行こうと思っている人はそれほど多くなかった。実際に、今でも付き合いのある4人の大親友のうち、3人は大学に行っていない。自転車で通える距離だからという理由で選んだ高校も、大学に進学しようという強い意思を持っている人はほとんどいなかった。そうした環境にいたために、大学に行くためには1人で勉強する必要があると思っていた。

中学校の卒業式の後、友達たちは記念撮影をしたり、部活の後輩たちと談笑したりと盛り上がっていたが、私は卒業式が終わって、最後のクラスルームが終わった後、記念撮影など1枚も取らず、誰も口を聞かないですぐに自宅に戻った。私は別に学校のみんなど仲が悪かったわけではなく、むしろ私たちの学年はとても仲が良く、私がサンフランシスコで生活をするようになってからは、同窓会を開くようになったぐらいである。そうした関係性でありながらも、卒業式後は私は誰も話をせずに一刻も早く自宅に帰り、自室に向かった。

そこで私が開いたのは、数研出版のチャート式IAだった。近くに本屋さえないようなこうした田舎にいるのだから、仮に大学に行きたいのであれば自分で勉強するしかないと思っていた私は、卒業式の直後から、チャート式の数学の問題に取り掛かっていたのである。そのような記憶がまず思い出された。その後、そうした意思を持って勉強を続けていた私は、高校に入ってから成績は良かったことも思い出した。あまり書きたくはないのだが、事実として書き留めておくと、高校に入ってから、高校1年生の秋以降の全国模試で偏差値が70を下回ることはなかったように思う。特に数学の成績が良かったのだが、高校1年生のある時、一度数学で偏差値が70を下回る時があり、母に結果を伝えたことがあった。

---

これは過去に何回か、そして昨年も母に聞いた話なのだが、これまで数学で偏差値が70を下回る事がなかった私に対して、成績表を見た母が思わず、「どうしたの？」という言葉述べた。私はその時の記憶がないのだが、母はその言葉を述べた後に、私の顔が青ざめたのを見たそうであり、そこからもう2度と勉強のことで何も言わないようにしようと誓ったそうだ。そのエピソードを昨年も聞いた。

中学校の時に赤本を購入し、中学校卒業後から1人で勉強を真剣に始めた私は、高校に入ってから全国模試で安定的に成績を取れるようになり、高校2年生の時には、もう大学入試の準備は終わったと思った。だが私は、一度受験に失敗している。今でも鮮明に覚えているが、あれだけ得意だった数学に関して、受験に際して志望校の入試問題に1問も完答することができなかったのである。その予兆としては、高校3年生の半ばから模試の成績に陰りが見えていた。というのも、高校2年生の時に入試の準備をもう終えたと思った私は、田舎の書店を廻り、有斐閣出版が出版している「別冊ジュリスト判例百選」などを購入し、司法試験の勉強を始め、そちらの勉強に時間を割いていたために、成績が落ちてしまったのだ。

それが影響して元々好きではなかったマークシート形式のセンター試験でも良い点数が取れず、二次試験に関しては数学が0完に終わるという結果だった。翌年、自らの意思で日本で随一の厳しさを持つ全寮制の予備校に入り、そこで男80人ぐらいと一緒に軍隊的な生活を送った。私は人生の中で、学びの面白さに目覚めた体験が2度ほどあり、それはアメリカの大学院に留学した時の体験とその予備校での体験だった。

気がつけばまだ作曲実践をしておらず、もう時刻は午前8時を回ったので、今後また予備校時代の記憶が蘇ってきたらそれについても書き留めておこうと思う。おそらく今でもまだ母校を含め、難関大学の数学の入試問題を毎年解こうとする自分がいるのは、純粹に数学が好きだからということもありませんが、同時に数学を通じて得たトラウマのようなものがあるからなのかもしれないと思う。

さてここで筆を置き、作曲実践を始めようと思ったところで、数学に関してはもう少し書き留めておいた方がいいように思った。私は30歳を過ぎてから、理系の科学者になる道を進むことにした。知性の発達を応用数学を活用して研究しようと思ったのは、先日言及したカート・フィッシャー教授やポール・ヴァン・ギアート教授の仕事に触れたことによる大きい。応用数学、とりわけダイナミック

---

システム理論を活用した研究のメッカであったオランダのフローニンゲン大学にどうしても行きたいと思った私は、アメリカでの生活をいったん切り上げて、フローニンゲン大学に行くための準備を日本で始めた。

結論から述べると、私はフローニンゲン大学に3回出願して、3回目でようやく入学許可を得た。日本の大学院入試と異なり、筆記試験などはないのだが、フローニンゲン大学で行いたい研究が理系のものであったから、数学と統計学の前提知識がないとダメであり、2度の不合格はそれが原因だった。

その後私は、日本にいながらにして、ジョンズ・ホプキンス大学の医学部が提供するオンラインコースに参加し、そこで統計学のコースを終了した。また、フローニンゲン大学のキャンパス訪問を兼ねて、その前にイギリスのケンブリッジ大学に行き、そこで統計解析専門のRというプログラミング言語の集中トレーニングに参加し、ジョンズ・ホプキンス大学のコースの証明書と、ケンブリッジ大学のコースの証明書を持ってフローニンゲン大学のアドミッションオフィスに行き、これならもう事前知識として大丈夫かと確認をした。その後、後にお世話になるルート・ハータイ教授とも面談をし、アドミッションの方と三者で面談をその場で行ってもらうことにし、その段階で暫定的な入学許可を得た。2度の不合格通知をもらう前に、最初から現地に行っておけば良かったと思ったものである。

そういえば、同様のことをジョン・エフ・ケネディ大学に出願する際にも行っていた。あの時は私はまだ会社員だったが、夏の休暇を利用してキャンパスを訪れ、そこで学科長と一対一で面談をしてももらうことによって、入学許可を得ることになった。

そうだった。一応今の話の主軸には数学があったのだった。今はもう直接的に数学を使って発達研究をしているわけではないが、数学的な発想は作曲実践の中にも活きている。手元には、数学を活用して作曲をしたヤニス・クセナキスの作曲方法に関する書籍や、幾何学的な観点から作曲について取り上げている書籍などもあり、作曲においても数学的な関心が見られることに気づく。そのようなことを思いながら、私が先ほど書こうとしていたのは、自分の数学的な知性の発達プロセスについてだった。

---

高校時代の数学の成績や、その後大学では金融工学で数学を活用したり、さらにその後は発達研究で数学を活用することになったのだが、自分の数学的な知性の発達はとても遅かったように思う。ここでも少しエピソードが思い出された。

中学校に入ってから数学の成績は悪くはなかったが、自分の中では、数学の抽象的な世界に馴染みが持てず、数学よりも英語の方が得意だと思っていて、自分の中では数学はむしろあまり得意ではないと思っていたほどだった。その観点からすると、私は数学の知性の発達は遅かったように思う。ここで少し不思議なのは、より具体的な世界を扱う算数に関しては小学校の頃大好きであり、そして得意だった。

今でも覚えているが、小学校2年生の時に、百マス計算のタイムを競うようなことが行われており、私とその学校に引っ越してくる前までは一番計算が早かった算盤を習っている友人が、私の計算があまりにも早いことに驚いたということの後日笑い話として聞いた。その時に彼は家に帰ってからお母さんに、「東京から転校して来た彼は計算が早くてびっくりしたんだけど、彼曰く、東京では普通だったんだって。東京とここではレベルが全然違うね」と述べたそうだ。そんな微笑ましいエピソードがある中で、また算数関係で思い出したエピソードがある。

このエピソードについては過去数年の間に何回か思い出すことがある。小学校4年生の時、どこかの連休を活用して家族旅行に出掛けた。父が有給を活用したのか、家族旅行の最終日はもう学校が始まる日であったが、せつくなのでということで、私は学校を休んで旅行に出掛けた。小学校の時にお世話になった先生の名前は今でも全員覚えていて、今の自分の人格形成に大きな影響を与えてくれたと思っている。4年生の時にお世話になっていたのは、非常に厳しい女性の先生だった。

旅行から学校に戻ってきた初日、私は学校を休んで旅行に出掛けたなどと言も述べていないのだが、旅先で足を運んだ陶器屋さんかどこかで、母が商品の金額を多く払い過ぎてしまったようであり、私たちは山口県からやって来たことを伝えていたので、その店の方が親切にもあの手この手で私が通っている学校を突き止めてくれたようだった。学校があるはずなのに学校に行っていない子供がいて、彼は山口県の小学校に通っているようだということで、教育委員か何かに連絡して、私の居場所を突き止めてくれ、多く払った代金を後日家に送ってくれた。

---

連休後に学校に戻って来た初日、普段と変わりなく授業が行われた。私も連休前と何も変わらず授業を受けていたのだが、学校が終わっていざ下校しようとした時に、先生に呼び止められ、先生と少し言葉を交わした。

先生:「加藤君、休んだ日の宿題、今ここでやってから帰りなさい」

私:「いや、家でやって来ますよ」

先生:「ダメよ。病気で学校を休んだわけじゃないでしょ？連絡があったのよ。旅行で学校を休んだんでしょ」

私:「別に休みたいくて休んだわけじゃないですよ。それに、その算数の宿題、みんなであれば1時間ぐらいで終わるものなんですよ。だったら、僕なら1分で終わりますよ」

先生:「だったら1分でやってから帰りなさい」

そのようなやりとりがあった後、先生も私もお互いに譲らず、お互いに興奮気味であったが、一応私は先生の言うことに従って居残りをすることにした。先生には強がって述べたが、算盤も習っていない私はどういうわけか、本当に他の生徒たちよりも計算が5倍から10倍ぐらい早く、宿題など家に帰ってすぐにできると思っていた。それを先生もわかっていたようだが、先生はどうしても学校に残って昨日の分の宿題をするようにと命じた。

正直なところ、私は早く家に帰って友達と遊びたかったので、かなりムクれて席に着き、いやいや算数の宿題に取り掛かった。日暮れの時間が近づいて来ていたのか、印象として教室の窓から見えた空が夕日に染められていたように記憶している。結局、どれくらいの時間がかかって宿題を終えたのかわからないが、宿題をしている最中、先生は机で自分の仕事に取り掛かっていた。それは、私たちの宿題の様子を見ていたり、私たちが書いた日記を読んでいたのだと思う。

このエピソードを思い出すたびに、私は両親と先生に感謝をする。まずは、学校を休んででも旅行に連れていき、旅でしか得られない体験をさせてくれた両親に対する感謝である。そう言えば、このエピソードとそれに伴う感謝の念は、昨年一時帰国して実家に帰った際に両親に伝えていたように

---

思う。両親への感謝の念に加えて、なんと言っても先生に対する感謝の念を覚えずにはいられない。

正直なところ、当時の私にとってみれば、居残りを命じた先生は憎たらしく思えたが、今になって思うと、自分には他の仕事がたくさんある中で、1人の生徒を残して宿題の面倒を見ることなどできるだろうか。私もアメリカの最後の1年間では教師の仕事と研究員としての仕事を掛け持ちしていたのだが、先生と同じような立場にあったら、果たして一緒に残って勉強を見ていたかと問われると、答えに窮する。

先生はきっと私のことを親身に思って一緒に居残りをしてくれていたのだろう。自分が宿題をぶつくさ文句を言いながらやっている最中も、黙って他の生徒の宿題を確認したり、生徒の日記を読んでコメントを付していた先生の姿が蘇る。先生が自分に注いでくれた愛情が今ならわかる気がする。フ  
ローニンゲン:2020/5/18(月)08:55

#### 5837. 幼少時代の思い出の続き

今日は少し不思議な日だ。早朝の4時前に起床し、もう時刻は午前9時を迎えようとしているのだが、まだ日記を綴ろうとしている自分がいる。

今朝はうっすらとした雲がフローニンゲン上空を覆っていて、日中は気温が20度近くにまで達するようだが、今は肌寒い。今日から月曜日ということだが、フローニンゲンらしく、休日と変わらない長閑さがある。当地において、もうコロナは随分と落ち着いており、この分だと来月のアテネ旅行は無事に行えそうだ。もう航空会社からフライトのキャンセルの連絡はないだろう。

コロナの一件で外出が自粛され、多くの人の生活習慣は変わったという話を聞くが、ふと私は、この9年間の欧米生活において、人々がコロナによって自宅に籠っていたのと同じような生活をずっと続けていたことに気づいた。自分の時間を多く持ち、自宅で探究活動に従事することを、この9年間異国の地で1人ずっと行っている。正直なところ、コロナの前と後でほとんど生活は変わっていない。そのようなことを思いながら、またしても幼少時代のことを思い出していた。

---

先ほど、幼少期に迷路を書くことに没頭していたと述べたが、迷路は脳内の神経回路の投影であり、緻密な迷路を書けば書くほどに、自分の脳内回路が発達していたのではないかとふと思った。その科学的な根拠は定かではないが、迷路を書くことの効果には何かしらのものがあり、また先ほどの日記で言及した私と同じく迷路を書いていた教え子のように、迷路を書くことに没頭する子供には何か共通したものがあるのかもしれないと思う。このあたりについても今度調査を試みようと思う。

今日はまだ日記しか書いていない。起床から5時間が経とうとしているが、それまでに行ったことと言えば、ヨガと座禅瞑想、そして日記の執筆と絵を少々描いただけである。肝心の作曲実践はまだしていない。今日は無性に言葉が形になろうとする日なのかもしれない。そこからふと、これまで何回か言及したことのある、小学校2年生の時に爆発的に日記を書いたあの日のことが思い出された。

私が住んでいた地域には珍しく、ある日、1学年下にブラジル人の転校生がやって来て、日本語が全く喋れない彼と友人とで遊んだ出来事がある。ブラジル人の彼は、私たちにハマって欲しいという気持ちがありながらも、少々喧嘩っ早い気性を持っており、彼と喧嘩をしてしまう出来事があった。その時のエピソードを、喧嘩に至る発端から情景描写までを、およそ30日分の日記のページを使って一気に書き上げたあの時の執筆体験を思い出した。

自分の内側には形になることを待っているものが無限に存在していて、それを何か爆発的な力によって外に形象化させていくということは、あの時もそうであろうし、今もそのような特性が見られる。今はもっぱら、内側で形を待つものを言葉だけではなく、音や絵としても表現している。言葉だけでは表現しきれなくなるという臨界点に達したがゆえに、作曲実践と絵画の創作が自分のもとに降って来たようにさえ思える。

幼少時代の不可解なエピソード。あれも私が小学校2年生の時のことだった。山口県への転校を済ませていたから、5月以降のことだろうか。いや、本当に転校直後のことだったかもしれない。その時にちょうどJリーグが開幕したのである。開幕戦をテレビで観戦していたのを今でも覚えている。

---

東京から山口県に転校した初日、聴き慣れない山口弁を話す子供たちに囲まれ、さらには登校の際に、足のふくらはぎがやたらと発達している子供たちを見て驚いたのを覚えている。東京の学校では私服だったので、制服を着ることにすごい違和感があった。今でも覚えているが、母と一緒に制服を選びに行った時、幼いながらも、制服と合わせてかぶる冬用の帽子が戦争時代の子供たちの格好のように思われ、とても嫌だったのを覚えている。また、登校用の靴も指定されており、その靴が白いトイレのスリッパのように見えてしまい、そんなものを履いて学校に行くのかと少々不安に思ったのを覚えている。

そうした不安も一気に解消したのは、学校に到着した初日に、元気一杯に話しかけて来てくれた優しい友人たちの存在だった。あの日の光景が今でも鮮明に忘れられずに残っている。そこから私は、近所に住むクラスメートの友人と登下校をするようになり、まずは山口弁が話せるようになる必要があると思って、彼からそれを教わった。いくつか特徴的な単語を覚え、語尾の感覚を早々と覚えた後は、より速やかに学校に溶け込んでいけたように思う。

山口県の長閑な環境で過ごせたことは私にとっての大きな財産となっており、転校に関して苦労したことはほとんどなく、上述の制服と靴に関する事以外は何も不満はなかった。ただ一点、これも母と時々懐かしく笑いながら思い出すのだが、私が山口県に引っ越した初年度の社宅では、テレビ朝日が映らなかった。そこで私は、好きだったアニメが見られなくて泣いたことがあった。山口県に来たことを呪ったのは、その時だけだったように思う。

母は私が、「ドラえもん」と泣きながら叫び、ドラえもんが見られないことを嘆いていたと言う。私の記憶では、ドラえもんではなく、クレヨンしんちゃんが見られないことに対して泣いていたように思うが、母は「テレ朝が見られなかったのだからドラえもんよ」と譲らない。調べてみると、クレヨンしんちゃんもテレ朝で放映されていたから、やはり私の記憶の方が正しいように思えるが、確かに「ドラえもん」と泣きながら叫んでいたような記憶がないでもない。3階の社宅の窓から目の前の公園が見えて、十分泣き終えた後に、ドラえもんが夕日を浴びながら公園に佇んでいるような哀愁的感覚があったのを覚えている。

不可解なエピソード。そうであった。それについて書き留めておこうとしていたのであった。後1時間ほどで協働者の有馬充美さんとの「一瞬一生の会」の第2期が始まる。その準備もあるので、取り急

---

ぎ、当初書こうとしていた事柄に戻ろう。Jリーグ開幕のエピソードについて書こうとしていたのであった。Jリーグが開幕してすぐの頃、ニッセイかどこかの生命保険会社から、Jリーグの選手名鑑が送られて来た。それは立派な書籍というよりも、冊子のようなものだった。

Jリーグが開幕した時に私の中で違和感があったのは、なぜ周りの友達たちは知らないサッカー選手たちがプレーしている姿を見て楽しんでいるのだろうかというものだった。当時の私は、選手たちを詳しく知って初めて面白くサッカーが観戦できると考えており、その選手名鑑が届けられたことを大変喜んだのを覚えている。そこから私が行ったのは、朝5時ぐらいに起き、学校に行く前に、選手名鑑に記載されている全選手の名前、生年月日、身長体重、出身高校を全部覚えることだった。登校前の時間だけではなく、学校から帰って来てもそのようなことを行っていたように思う。

なぜかそのような記憶がふと蘇って来た。その時の没頭感覚というのは今の日々の活動への取り組み姿勢と瓜二つである。時刻はもう午前10時を迎えたので、そろそろ日記の執筆以外のことに取り組みかろうと思う。フローニンゲン:2020/5/18(月)09:57

### 5838. 今朝方の夢と幼少期のエピソードの続き

時刻は午前6時半を迎えた。今朝は少しばかり薄い雲が空を覆っている。

昨日から、「一瞬一生の会」の第2期が始まった。セッション終了後、私の方で補助録音教材を作ろうとしたところ、今回もまた様々な話題について話をし、結局3時間弱ほど1人で話をしていた。

就寝準備を始める5分前に補足したいと思う内容が思いつき、それについても1人で喋って録音してから就寝したので、少し脳が興奮状態の中就寝に向かう形となった。とはいえ、就寝準備中にできるだけ脳の活動を休めようと心がけていたためか、入眠は比較的速やかであり、睡眠の質についても問題はなかった。

昨日は色々取り組むべきものがあったので、創作活動に時間を充てることはほとんどできず、絵を数枚ほど描き、曲に至っては早朝の1曲しか作れなかった。昨日の朝には日記の執筆に5時間ぐら

---

い時間を充てていたこともあったので、それは仕方ないだろう。今の心の状態を眺めてみると、今日は通常通りに創作活動に励むことができそうだ。

今朝方は無意識が落ち着いていたのか、あまり印象に残る夢を見ていなかった。オランダの現在の自宅が夢の中に現れ、私は螺旋階段を下りて、外出しようとしていた。2階の家の前の扉が以前とは違って、日本風のふすまのようになっていた。それを見て、2階の住人が何かの思いでそうした扉にしたのだろうと察した。部屋からは、オランダのポップミュージックが流れていて、その音が外に少し漏れていた。今朝方の夢について覚えているのはそれぐらいだろうか。この夢の前に何らかの夢を見ていたことは覚えている。だがその記憶は曖昧だ。

昨日の朝には、夢以外にも、随分と過去の記憶を遡っていたように思う。昨日の日記には書き留めていなかったが、やはり私は幼少期の頃から、人を楽しませ、喜ばせることが好きだったことを示唆するエピソードがいくつもあることに気づく。

ふと思いだされたのは、小学校3年生の担任の先生が家庭訪問で我が家にやってきた時、先生は母が差し出したお茶をなかなか飲まずに話をしていた。先生のそんな姿を見た時に、私は先生が遠慮しているというのがわかり、おそらくお茶を飲まないままにいることが礼儀なのだろうと察していたが、先生の遠慮した心を解きほぐすために、「先生、お茶ありますよ。飲まないんですか？」と冗談まじりで述べると、先生も母も笑い、その場の雰囲気や和やかになって、先生は「それじゃあいただきます」と述べてお茶を飲んだ。そんなエピソードがあったことを昨日ふと思いだしていた。人を楽しませる形で心を動かし、行動を起こしてもらおうこと。そのようなことが好きな自分は今も昔も変わらずにここにいるように思う。フローニンゲン:2020/5/19(火)06:56

### 5839. 守り続けてきた自己の創造性

そよ風が、新緑の葉を優しく撫でながら挨拶をしている。新緑の葉はそれに対してなんと答えているのだろうか。

時刻は午後7時を迎えた。今、フローニンゲン上空の空には薄い雲がかかっている。今日もまた1日がゆったりとした時の進行過程の中で過ぎていった。

---

早朝にふと、私は自分の内側にある最大の関心事項を長く守り続けていたのかもしれないということを使った。今このようにして創作活動に打ち込んでいるのは、幼少期の頃からすでに内在的に自分の内側にあった最大の関心事項を守り続けていった結果によるのではないかと思ったのである。端的には、学校教育を通して、自分の創造性の芽が摘まれてしまうことから自己を守り続けた結果、そこから長大な時間を経た後に、今こうして創作活動に没頭する自己が生まれたのかもしれないということに気づいたのだ。

学校教育において、音楽と美術の授業を徹底的に手抜きをしていたのは、学校のカリキュラムによって自分の内側の音楽的な何かと絵画的な何かを損なわれないようにするための小さな反抗だったのかもしれない。そうした反抗を企て続け、自分は内側の創造性を守りに守り抜いて来たのだ。それを守るための防波堤、ないしは城壁を築き上げ、今度はそれらを取り壊し、真に自分の内側の創造性を解放するプロセスに向かった。創造性を守るための殻は厚く、それを解体するには長大な時を要した。それが欧州の地にやって来てから溶解し、そこからようやく自分は己の創造性を見つけ、創作活動を開始したのだろう。そのようなことを早朝に考えていた。

その他にも今日は、自分は決してストイックに生きているわけではなく、学びたいこと・実践したいことだけを毎日やっているのだから、それは禁欲主義とは真逆のもののように思えるということについても考えていた。自己の最奥が望む創作活動に没頭していることは、禁欲主義よりも、むしろ快樂主義的ですからあるように思える。そうした気づきがあった。

日々が気づきの連続であるということ。発見の連続であるということ。今日も様々な自己発見がある日であった。明日もまたそうした発見があるだろう。それはこの世界の中で他者と関係し合いながら生きていくことを通じてなされる自然な事柄なのだ。フローニンゲン:2020/5/19(火) 19:32

#### 5840. アテネ旅行の延期とここ数日間の睡眠の質について

時刻は午前6時半を迎えた。今朝もまた、空には薄い雲がかかっている。朝日を拝むことはできないが、その代わりに小鳥たちの鳴き声はいつものように聞こえてくる。今、彼らの鳴き声に耳を傾けている。

落ち着いた心。今日もそれを持って自分の取り組みに励みたい。

---

---

今週の月曜日から「一瞬一生の会」の第2期が始まったことに伴って、ここ数日間は随分と補助録音音声を作成していた。昨日もいくつか音声ファイルを作成していて、合計すると1時間以上1人でいくつかのテーマについて話をしていたように思う。発達測定に関するテーマについても話をし、このテーマは様々な角度から取り上げることができるので、昨日は私が知っている範囲の6つぐらいの発達測定手法を取り上げ、それぞれの特徴について紹介した。

今回の参加者の皆さんが実務家であるという点から、そのアセスメントを受けること、ないしは組織に導入することを前提に、各アセスメントの費用的な側面についても言及した。今日仮に音声ファイルを作成するのであれば、仮に新たにアセスメントを開発するのであれば、どのような手順で開発がなされ、どれだけの時間と費用がかかるのかについて言及したいと思う。それに加えて、自分自身がアセスメントの開発についてどのように考えているのかを、自分の心の問題、開発上のテクニカルな問題、アセスメントを開発して世に送り出した時の社会の問題などについても言及したいと思う。

数日前に、6月末に予定しているアテネ旅行が実現しそうだと述べたが、昨日にまたしても航空会社からメールがあり、フライトがキャンセルになってしまった。これでもう3度目である。それを受けて、今度は真剣に、いつアテネに行くのが良いのか考え始めた。これまではフライトのキャンセルの都度、1ヶ月ずつ伸ばして来たが、それがことごとくキャンセルになった。今回は1ヶ月よりもさらに先に伸ばそうと思ったが、この意思決定はおそらく少し前の段階でしていた方が良かったのかもしれない。むしろコロナがもう落ち着きを見せているこの状況においては、ここでもまた1ヶ月伸ばすことで問題ないかもしれない。

私の街でも先日からようやく接客業の店が開き始め、明日ようやく髪の毛を切れる。街にも活気が戻って来ており、人々の表情も明るい。そうした状況にあることを考慮に入れて、ホテル側も何回でも予約変更が可能だと親切に述べてくれていることもあり、近々航空会社に連絡して、7月末にフライトを変更してもらおう。当初は、アテネを訪れるのにお勧めの春の時期に行こうと考えていたのだが、7月末となると随分と暑いアテネを体感することになりそうだ。

7月末のアテネ旅行が無事に実現したら、春のアテネには呼ばれず、何らかの理由で夏のアテネに呼ばれたのだと考えよう。きっとそういう運命だったのだ。

---

その他に書き留めておくこととしては、この2日間は諸々取り組むことがあり、夜の就寝準備の直前までパソコン画面と向き合うことになり、それが明らかに睡眠の質に影響していることが改めてわかった。もちろんこの2日間も早く就寝していることは確かであり、起床後も心身の状態が悪いわけでは決してないのだが、いつもの最善の状態ではないということだけはわかる。そうしたことから、今夜からはやはりパソコン画面を就寝前に見つめすぎないようにし、9時半から就寝に向けた準備をすることは徹底して守りたいと思う。ちょっとしたことなのだが、その僅かな差が明らかな質的な差を生み出していることは観察から一目瞭然であり、最良の治癒をもたらしてくれる睡眠の質を確保することは常に意識しておきたいと思う。フローニンゲン:2020/5/20(水)06:56